

「未来を築く子どもの学力向上協創プロジェクト」 平成27年度第1回推進会議の概要について

「未来を築く子どもの学力向上協創プロジェクト」の平成27年度第1回推進会議を、平成27年7月15日(水)に開催しました。

第1回推進会議には、7名の委員のうち5名の方々にご出席いただくとともに、会議の進行を補助するファシリテーターとして国立大学法人三重大学教育学部教授の山田 康彦氏にご出席いただきました。

なお、第1回推進会議の概要は、以下のとおりです。

「未来を築く子どもの学力向上協創プロジェクト」委員及びファシリテーター

※敬称略、50音順、カッコ書は役職

安藤 大作 (三重県PTA連合会 顧問)
石川 正浩 (サポーターいっちゅう 事務局次長兼広報部長)
田尾 友児 (三重県立紀南高等学校 学校運営協議会 委員)
竹内 勇夫 (伊勢市立小俣中学校 校長)
西岡 慶子 (株式会社光機械製作所 代表取締役社長)
※西岡委員はご欠席
藤田 曜久 (三重県立相可高等学校 校長)
※藤田委員はご欠席
山田 忍 (スクールカウンセラー)

ファシリテーター

山田 康彦 (国立大学法人三重大学 教育学部 教授)

<推進会議の進行概要>

会議の大まかな進行は以下のとおり

開会 13:30

- ・教育長あいさつ
- ・事務局による資料の概要説明
「協創プロジェクト推進会議の進め方」
「平成26年度の各実践取組の評価」
「平成27年度の取組概要」

プロジェクト推進についての意見交換

- ・本年度の展開等について意見交換を実施

閉会 15:30

(山口教育長あいさつ、県事業の説明)

冒頭、山口教育長から委員の皆さんに本日の会議の開催趣旨について説明しました。



その後、事務局より資料に基づき、「新しい豊かさ協創プロジェクト推進会議の進め方」、「平成26年度における各実践取組の評価」及び「平成27年度の取組概要」について説明しました。

※プロジェクトで挑戦する4つの実践取組

- ①「県民総参加による学力の向上」
- ②「地域に開かれた学校づくり」
- ③「教職員の授業力向上」
- ④「安心して学べる環境づくり」

（プロジェクト推進についての意見交換）

続いて、山田教授の司会によりプロジェクトの推進に向けた意見交換を行いました。

各委員からは、日頃の活動を通じて感じる課題や子どもの学力向上に向けた本年度の展開等について、意見や提案をいただきました。

※委員からの主な意見

○いろいろな取組が行われているが、優先順位をつけて、それを徹底的に深掘りしていく時期ではないか。その一つとしてアクティブ・ラーニングがよいのではないか。

○子どもの自己肯定感を高めるためには、日常生活の中で、子どもの話をじっくり、ゆっくり聞いて、ほめることが大事である。聞いてくれる人がいれば話すことにつながり、聞いてもらえないと話すことをあきらめることになる。そのようなことが、全国学力・学習状況調査での無解答にもつながっていく。



○教員研修の講師をしているが、学校が地域のコアであるという意識が低い。「地域は外部」という思いが教員にある。教員が意識を開くことが大事である。また、学校と地域とのつながりを継続させていくためには、フォローアップや、成功事例のフィードバックが大事である。

○チャイルドラインの会員（受け手）になっているが、チャイルドラインの研修を受講してもらえれば、自己肯定感が高まる。教員も受けてほしい。

○知人が、福井県から転居してきた人から、三重県は親にも学校にも学力に危機感がないと言われた。教員も教えてはいるが、学力を上げる方法を知らないのではないか。

○学校が安心して通える状況にあり、教員がゆとりや余裕を持って業務に臨めれば、子どもたちが意欲を持って仲間とともに学ぶことができる。また、県が推進している、少人数教育やチームティーチング、司書配置、研修などは、学校現場にはいい影響が出ている。

○スクールカウンセラーとしてクラスの行動観察をしているが、小学校に入学してきた児童の中には、社会性に乏しかったり、集団活動ができない子どもがいると感じている。これは、保育所に行っていた子どもに多い。保育所は民間委託になっており、幼稚園教諭のような研修もない。

○10年前は、経験のある教員にこれまでのやり方が通用しないという悩みが多かったが、最近では、新採等若い教員の授業力が低い。それを学校もバックアップはするが、カバーしきれていない。

○不登校の対応については、10年程前までは、良くも悪くも一生懸命であった。最近では、教員が不登校に慣れてしまっていることもあるが、先生が弱っていて、かつてほど真剣になれていない。

○小学校の低学年までは、思いを言葉でなく行動で示し、自分の行動が集団に受け入れられたときに、自己肯定感が増す。

○子どもの学力向上は、先生の力量にかかっている。先生のスキルを上げる必要があるが、研修だけでは上がらない。何をすればいいのか、もっと踏み込んでいければいい。また、取組の成果が、県全体ではすぐには現れてこないが、個々の学校の取組の成果は分かるので、それを共有していくことが重要である。仕組みは作られているので、それをどう運用していくかが課題である。



○最近、中学校に教育実習に行くのに、生徒がこわくて、思い切った授業ができないといった学生がいる。優しい学生が多いが、不登校の子どもに積極的に接触できないことにつながる。大学でもいろいろな取組をしているが、そういった学生が出てくる。教師に求められる力をつけさせているのか問われてきている。

○実践校での授業風景をみたが、工夫されている。ただ、子どもに正解や答えを早く求めすぎている。

○県教委が月1回発行している「学力向上通信」は、がんばっている学校を取り上げていて、とても良い。

○学び場通信により、良い事例の横展開を目指している。今回豊地小学校を取り上げたが、当該校で「分からない時に、分からない」と言える雰囲気が出てきたとの報告もある。

○三重県は、地域教育力が低いと思う。

○採用試験の改善を進めている。例えば、模擬授業のテーマを事前でなくその場で与える、ディベートを導入する等である。今後も、一定の改善が必要であり、考えていく。

○校長の授業見回りについて、数字は上昇しているが、上がったとみるか、まだ不十分とみるかは、全国学力・学習状況調査の結果にもよる。結果が出なければ、徹底して100%を目指さないといけないと思う。

○多くの方に教員を志してほしい。採用試験については、現場の状況を踏まえ、他県の状況も把握しながら改善していくことが必要と考えている。

○教師の育て方について、本校では常勤講師に講師研修をするとともに、学活の時間等に校長室へ集め、相互に「今悩んでいること」「うまくいったこと」を共有する取組を行っている。

など